

Title	陽明文庫蔵「道書類」の紹介(十三):『〔仮名書き法華經〕卷第七』翻刻・略解題
Sub Title	
Author	恋田, 知子(Koida, Tomoko)
Publisher	慶應義塾大学国文学研究室
Publication year	2013
Jtitle	三田國文 No.57 (2013. 6) ,p.27- 44
JaLC DOI	10.14991/002.20130600-0027
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00296083-20130600-0027

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

陽明文庫蔵「道書類」の紹介(十三)

——『仮名書き法華経』巻第七』翻刻・略解題——

恋田 知子

前号に続き、陽明文庫蔵「道書類」のうち、『仮名書き法華経』巻第七』を紹介する。これまでも述べたように、陽明文庫蔵「道書類」は、仮名法語を中心に、あわせて十八種類の書物が一括されたものであり、慶長・元和年間（一五九六—一六二四）の奥書を有するものが含まれていることや、とりたてて書写時期の異なるものも見えないことなどから、本書についても、おそらく同じ時期に書写されたものと推察される⁽¹⁾。

本書は、漢訳の『妙法蓮華経』を仮名交じりの訓み下しにした仮名書き法華経である。常不輕菩薩品第二十から始まり、如来神力品第二十一、嘱累品第二十二、薬王菩薩本事品第二十三、妙音菩薩品第二十四を収める巻第七のみを伝える。仮名書き法華経は、主に国語学の分野での研究蓄積があり、いくつかの伝本の存在が知られている⁽²⁾。代表的なものとしては、鎌倉中期の妙一記念館本や元徳二年（一二三〇）写の足利学校本、近世中後期の月ヶ瀬本などがある。全巻揃いは現在のところ十種程度と少なく、本書と同様、一部のみを残すものや、法華経切として伝わるもの、訓読付きの版本なども含めると多数伝存する。諸本の系統については、妙一本の系統を引くものが多いも

の、諸本により和文化の方法は様でなく、語彙などに相違が見られるという。本書についても語彙や語順、左訓の表記など妙一本との共通が認められるが、独自表記も見受けられる。仮名書き法華経については、しばしば女性の説話を意図したとの指摘もなされており、本書物群の生成・享受や伝来を考える上でも興味深いものがある。書誌については、以下のとおりである。

- ・ 函架番号 近トー七二一チ
 - ・ 形態 写本。一冊。仮綴。
 - ・ 寸法 縦二九・七糎。横二二・二糎。
 - ・ 表紙 本文共紙。鳥の子紙。
 - ・ 首題 「妙法蓮華経 常不輕菩薩品第二十」
メウハレンゲキヤウジヤウフキヤボ サツホダ
 - ・ 尾題 「妙法蓮華経巻第七」
 - ・ 丁数 墨付き四十五丁。
 - ・ 本文 半葉九行。漢字平仮名交じり。字高約二二・五糎。
 - ・ 奥書 なし。
 - ・ 印記 一丁表右上に「陽明蔵」の朱額形印あり。
- 翻刻に際して、本文は底本に忠実を期したが、私に句読点を打

つなど、読解の便宜をはかった。

注

- (1) 陽明文庫蔵「道書類」の詳細については、『三田國文』連載の紹介のほか、拙稿「室町期の往生伝と草子―真盛上人伝関連新出資料をめぐる―」（『唱導文学研究』第六集 三弥井書店 二〇〇八年）、拙稿「説法・法談のラコ絵―幻中草打画の諸本―」（『仏と女の室町―物語草子論―』笠間書院 二〇〇八年）、拙稿「比丘尼御所文化とお伽草子―恋塚物語―をめぐる―」（徳田和夫氏編『お伽草子 百花繚乱』笠間書院 二〇〇八年）を参照されたい。
- (2) 中田祝夫氏編『妙一記念館本仮名書き法華経』影印篇上・下、翻字篇、索引篇、研究篇（仏乃世界社 一九八八・九三）、田島毓堂氏「法華経訓読史研究の諸問題」（『名古屋大学文学部研究論集』一二四、一九九六）、柴佳世乃氏「法華経の訓読―仙岳院蔵〈仮名書き法華経〉」（『宝鏡寺蔵「妙法天経解釈」全注釈と研究』笠間書院 二〇〇一）、野沢勝夫氏「仮名書き法華経」研究序説（勉誠出版 二〇〇六）等参照。

【附記】

本書の閲覧ならび翻刻の御許可を賜った、財団法人陽明文庫に深く感謝申し上げる。また、本書の翻刻・考察に際して、御教示賜った、陽明文庫長名和修先生に、心より御礼申し上げます。

なお、本稿は科学研究費補助金 若手研究（B）（課題番号二二七二〇〇九〇）、および基盤研究（C）（課題番号二五三七〇二五九）による研究成果の一部である。

【翻刻】

妙法蓮華経 常不軽菩薩品第二十
そのときほとけ、得大勢菩薩摩訶薩に
つげたまはく、なんぢ、いま、まさにしるべし。も
し、比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷の、法華経
をたまたんものを、もし惡口・罵詈・誹謗す
ることあらは、大罪報をえんこと、さきにとく
ところのごとし。その所得の功德は、さきにと
くところのごとく、眼・耳・鼻・舌・身・意、清淨
ならむ。得大勢、乃往古昔、無量無邊不可
思議阿僧祇劫をすきて、ほとけましくき。
威音王如来・應供・正遍知・明行足・善逝・世間
解・無上士・調御丈夫・天人師佛・世尊となづけた
てまつる。劫をは、離衰となづけ、くにを大成と
なづく。その威音王佛、かのよのなかにして、天人
阿脩羅のために、法をときたまひき。聲聞
をもとむるものゝためには、應せる四諦の法をと
きて、生老病死をわたり、涅槃に究竟せし
め、辟支佛をもとむるものゝためには、應せる十二
因縁の法をときて、もろくの菩薩のためには、
阿耨多羅三藐三菩提によせて、應せる六波
羅蜜の法をときて、佛恵を究竟せしめたまひ
き。得大勢、この威音王佛のいのちは、四十万億
那由他恒河沙劫なり。正法よに住せし劫數は、一

閻浮提の微塵のごとし。像法、よに住せし劫數は、四天下の微塵のごとし。そのほとけ、衆生を饒益をはりて、しかうしてのちに、滅度したまひき。正法像法、滅盡してのち、この國土にまた、ほとけいたまふことありき。また威音王如来・應供・正遍知・明行足・善逝・世間解・无上士・調御丈夫・天人師仏・世尊となつてたまつる。かくのごとく、次第に、二万億のほとけましくき。みな、おなじく一号なり。最初の威音王如来、すでに滅度したまひて、正法、滅してのち、像法のなかに、増上慢の比丘、大勢力ありき。そのときに、ひとりの菩薩比丘あり。常、不輕となづく。得大勢、なむの因縁をもてか、常不輕となづく。この比丘、をよそ見るところあり、もしは比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷を、みなことくく礼拝讃歎して、この言をなさく、われ、ふかくなむぢらをうやまふ。あへて、輕慢せず。ゆへはいかん、なむたち、みな、菩薩の道を行じて、まさに、ほとけになることをうべければなりしかも、この比丘、もはら經典を讀誦せずして、たゞ礼拝を行しき。乃至とく、四衆を見ても、またまた、ことさらにゆきて、礼拝讃歎して、この言をなさく、われ、あへて、なんぢらをかるしめず、なんたち、みな、まさに、ほとけになるべきゆへに、四衆のなかに、瞋恚をなし、こゝろ不淨なるも

「(2オ)

「(2ウ)

「(3オ)

のありて、惡口罵詈しはいはく、この無智の比丘、いづれのところよりきたりてか、みつから、われ、なんぢをかるしめずといひて、われらがために、記をさつて、まさに、ほとけになることをうべしといふ。われら、かくのごときの虚妄の授記をもちあらず。かくのごとく、多年を経歴して、つねに罵詈せられしかとも、瞋恚をなさずして、つねにこの言をなさく、なんち、まさに、ほとけになすへしと。この語をとくときに、衆人、あるひは、杖木・瓦石をもて、これを打擲すれとも、きはしりて、とをく住して、なを高聲にとなへて、いはく、われ、あへて、なむたちをかるしめず、なんち、みな、まさにほとけになるべし。それ、つねにこの語をなすをもてのゆへに、増上慢の比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷、これをなづけて、常不輕とす。この比丘をはりなむとせしときにぞみて、虚空のなかにして、つぶさに威音王佛の、さきにきたまふところの法華經の、二十万億の偈をきゝて、ことくよく受持して、すなはち、かみのごとく眼根清淨、耳・鼻・舌・身・意根清淨をえつ。この六根清淨をうることをはりて、さらに、壽命をますこと、二百万億那由他歳、ひろくひとのために、この法華經をとき、増上慢の四衆、比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷の、この

「(3ウ)

「(4オ)

「(4ウ)

ひとを輕賤して、不輕のなを為作せしもの、
その大神通力・樂說辨力・大善寂力をえたる
を見て、その所説をきゝて、みな信伏隨從しき。

この菩薩、また千万億の衆を化して、阿耨
多羅三藐三菩提に住せしめつ。命終

の、ち、二十億のほとけにあふことえたり、みな
日月燈明となづけたてまつりき。その法

のなかにして、この法華經をとく。この因縁を
もて、また、二十億のほとけにあいたてま

つりき。おなじく、雲自在王となづけたてまつる。こ

の諸佛の法のなかにして、受持讀誦し、もろくの
の四衆のために、この經典をとくがゆへに、これ

つねのまなこ、清淨に、耳・鼻・舌・身・意の
諸根清淨なることえつ。四衆のなかにして、法

をとしに、こゝろにおそろゝところなかりき。
得大勢、この常不輕菩薩摩訶薩、かくのこと

き、そこばくの諸佛を供養じたまつり、
恭敬尊重讚歎し、もろくの善根をうへたり。

のちにまた、千万億のほとけにあひたまつり、
また、諸佛の法のなかにして、この經典をとき、

功徳成就して、まさに、ほとけになるこゝろへかり
き。得大勢、こゝろをきて、いかん。そのとき、常不

輕菩薩といひし、あにこひとならむや。すなはち、
わが身、これなり。もし、われ、宿世にこの經を受

「(5オ)

持讀誦し、他人のためにとかざらましかは、とく
阿耨多羅三藐三菩提をうるこゝろあたはじ。

われ、先佛のみもとにして、この經を受持讀誦
し、ひとのためにときしがゆへに、とく、阿耨多羅

三藐三菩提をえたり。得大勢、かのときの四
衆、比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷、瞋恚のこゝろ

をもて、われを輕賤せしがゆへに、二百億劫、つね
にほとけにあはず、法をきかず、僧を見ず、千劫

阿鼻地獄にして、大苦惱をうく。このつみを
ふることをはりて、また、常不輕菩薩の、阿耨

多羅三藐三菩提に教化せるにあひにき。
得大勢、なむちかこゝろをきて、いかん。そのとき

の四衆、つねにこの菩薩をかるしめしもの、あに
ことひとならむや、いま、この會のなかの跋陀婆羅

等の五百の菩薩、師子月等の五百の比丘尼、思
佛等の五百の優婆塞、みな阿耨多羅三藐三菩提

にきて、退轉せざるもの、これなり。得大勢、ま
さにしるべし。この法華經は、おほきに、もろくの

菩薩摩訶薩を饒益して、よく阿耨多羅
三藐三菩提にいたらしむ。このゆへにまろくの

の菩薩摩訶薩、如来滅後に、つねにこの經を
受持讀誦解説書寫すべし。そのときに、世

尊、かさねてこの義をのへんとおほして、偈を
ときてのたまはく、

「(6オ)

「(6ウ)

「(7オ)

過去にほとけましくき。威音王となづけ
てまつる。神智無量にして、一切を將導し、

天人龍神の、ともに供養したてまつるところな
り。このほとけの滅後に、法つきなむとせし

とき、ひとりの菩薩ありき。常不輕となづく。と
きに、もろくの四衆、法に計着せり。不輕菩

薩、そのところにゆきいたりて、これにかたりて
いはく、われ、なんぢをかるしめず。なんぢ、道を

行じて、みな、まさに、ほとけになるべければな
り。諸人きゝおはりて、輕毀し、罵詈せしに

不輕菩薩、よくこれを忍受しき。そのつみを
へをはりて、命終のときにのぞみて、この経を

きくことえて、六根清淨なり。神通のゆへに、
壽命を増益して、また、もろくのひとのために、

ひろくこの経をとく。もろくの着法の衆、みな、
菩薩の教化成就して、佛道に住せしむること

をかうふる。不輕、命終して、無數のほとけにあひ
たてまつり。この経をとくかゆへに、無量の福を

えし、やうやて、功德を具して、とく仏道なり
き。かのときの不輕は、すなはち、わか身、これなり。と

きの四部衆の着法のものゝ、不輕のなんち、ま
さにほとけになるべしといふをきゝしは、この因縁を

もて、無數のほとけにあいたてまつれり。この
會の菩薩、五百の衆、あはせておよひ、四部の消

信の士女の、いま、わがまへにして、法をきくもの、こ

「(7ウ)

れなり。われ、前世に、このもろくのひとをすゝめ
て、この経の第一の法を聴受せしめ、ひとに開示
し、をしへて、涅槃に住せしめ、世世にかくのこと
き經典を受持しき。億億万劫より、不可議
にいたりて、ときに、いまし、この法華經
をきくことをう。億億万劫より不可議にい
たりて、諸佛世尊、ときに、この經をときたまふ。
このゆへに、行者、ほとけの滅後に、かくのこ
とき經をきゝて、疑惑をなすことなかれ。まさに、こ
ころをひとつにして、ひろくこの經をとくべし。
世世にほとけにあいたてまつりて、とく仏道
ならむ。

妙法蓮華經 如來神力品第二十一

「(8オ)

そのときに、千世界、微塵等の菩薩、摩訶薩
の地より涌出せるものゝ、みな、佛前にして、こゝろ
をひとつにし、たなこゝろをあはせて、尊顏を瞻
仰して、ほとけにまうしてまうさく。世尊、わ
れら、ほとけの滅後に、世尊の分身の所在の
國土、滅度のところにして、まさに、ひろくこの
經をとくべし。ゆへはいかん、われら、またみつから

この眞淨の大法をえて、受持誦誦解説書

寫して、これを供養したてまつらむとお
もふ。そのときに、世尊、文殊師利等の、無量

百千万億の、舊住娑婆世界の菩薩摩訶薩、
をよみろくの比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷・

「(9オ)

「(9ウ)

「(10オ)

天・龍・夜叉・乾闥婆・阿脩羅・迦樓羅・緊那羅・摩睺羅伽・人・非人等の一切の衆のまへにして、大神力を現したまふ。廣長舌をいだして、かみ、梵世までにいたらしめ、一切の毛孔より、無量無數のひかりをはなちて、みな、ことく、あまねく十方世界をてらしたまふ。もろくの寶樹下の師子座上の諸佛も、またくかくのこく、廣長舌をいだし、無量のひかりをはなちたもふ。釋迦牟尼佛、をよび寶樹下の諸佛、神力を現したまふとき、百千歳を満す。しかうして、のちかへりて、舌相をおさめて、一時に聲歎し、ともに彈指したまふ。このふたつの音聲、あまねく十方の諸佛の世界にいたりて、地、みな、六種に震動す。そのなかの衆生、天・龍・夜叉・乾闥婆・阿脩羅・迦樓羅・緊那羅・摩睺羅伽・人・非人等、ほとけの神力をもてのめへに、みな、この娑婆世界の無量無邊百千萬億のもろくの寶樹下の師子座上の諸佛を見たてまつり、および釋迦牟尼佛、多寶如來とともに、寶塔のうちにましくて、師子の座に坐したまへるを見たてまつり、また、無量無邊百千萬億の菩薩摩訶薩、をよびもろくの四衆の、釋迦牟尼佛を恭敬し、圍繞したてまつるを見る。すでに、これを見ることをはりて、みな、おほきに歡喜

「(10ウ)

「(11オ)

して、未曾有なることえつ。すなはち、ときに、諸天、虚空のなかにして高聲となへて、いはく、この無量無邊百千萬億阿僧祇の世界をすきて、くにあり、娑婆となづく。このなかにほとけまします、釋迦牟尼となつてまつる。いまもろくの菩薩摩訶薩のために、大乘經の妙法蓮華教菩薩法所護念となづくるをときたまふ。なんたち、まさに、深心に隨喜すべし。また、まさに釋迦牟尼佛を禮拜供養したてまつるへし。かのもろくの衆生、虚空のなかのこゑをきくことをはりて、たなこゝろをあはせ、娑婆世界にむかひて、かくのことき言をなさく、南無釋迦牟尼佛、南無釋迦牟尼佛と。種種の華・香・瓔珞・幡・蓋、をよびもろくの嚴身の具・珍寶・妙物をもて、みな、ともに、はるかに娑婆世界に散ず。散ずるところの、もろくの十方よりきたること、たとへは、くものあつまれるかごとくして、變じて寶帳となりて、あまねく、このあひだの諸佛のみうへにおほふ。ときに、十方世界、通達して無礙なること、一佛土のごとし。そのときに、ほとけ上行等の菩薩大衆につけたまはく、諸佛の神力はかくのことく、無量無邊不可思議なり。もし、われこの神力をもて、無量無邊百千萬億阿

「(11ウ)

「(12オ)

「(12ウ)

僧祇劫におきて、囑累のためのゆへに、

この経の功德をとくとも、なをつくすこと

あたはじ。要をもて、これをいは、如来の一切

の所有の法、如来の一切の自在神力、如

来の一切の秘要の蔵、如来の一切の甚深の事、

をば、みな、この経にをきて宣示顯説したま

ふ。このゆへに、なんち、如来滅後に、まさにこゝ

ろをひとつにして、受持讀誦解説書寫し、説

のごとく修行すべし。所在の國土に、もし受持

しとくしゆし解説し書寫し、説のごと

く、修行することあらん。もしは、経卷所住の

ところ、もしは、そのゝなかにしてもあれ、もしは

はやしのなかにしてもあれ、もしは樹下にし

てもあれ、もしは僧坊にてもあれ、もしは白

衣舎にもあれ、もしは殿堂にありてもあれ、

もしは山谷曠野にもあれ、このなかにみな塔を

たて、供養すべし。ゆへはいかん、まさにしるべ

し。このところは、すなはち、これ道場なり。諸

佛こゝにして、阿耨多羅三藐三菩提をえ

たまふ。諸佛こゝにして、法輪を轉したまふ、

諸佛こゝにして、般涅槃したまふ。そのとき

に、世尊、かかねて、この義をのべんとおほして、

偈をときてのたまはく、

諸佛、救世者、大神通に住して、衆生をよろ

「(13オ)

こばしめむかためのゆへに、無量の神力を現したまふ。舌相、梵天までにいたり、身より無數の希有の事を現したまふ。諸佛、警效のみこゑをよび、彈指のみこゑ、あまねく十万のくにきこえて、地、みな六種にうごく。ほとけの滅度のうちに、よくこの経をたまたんをもてのゆへに、諸佛みな歡喜して、無量の神力を現したまふ。この経を囑累せんかゆへに、受持者を讚美すること、無量劫のなかにをきてすとも、なをつくすことあたはじ。このひとの功德はほとりなく、きはまりあることなけむ。十万の虚空の、邊際をうべからざるがごとし。よく、この経をたまたんものは、すなはち、すてにわれをみ、また多寶佛、をよびもろくの分身者を見、また、わか、今日教化せるもろくの菩薩を見るに、なりなむ。よくこの経をたまたんものは、われ、をよび分身、滅度の多寶佛をして、一切みな、歡喜せしめん。十方現在のほとけあはせて、過去未來をまたみ、また供養したまつり、また歡喜することえしめむ。諸佛の道場に坐して、ゑたまへるところの秘要の法、よくこの経をたまたんものは、ひさしからずして、また、まさうべし。よく、この経をたまたんものは、諸

「(13ウ)

「(15オ)

「(14ウ)

法の義、名字をよひ言辭にきて、樂説窮盡なきこと、かぜの空中にして、一切障礙なきかことくならむ。如来滅後に、ほとけの所説の經の因縁、をよび次第をしりて、義にしたがひて、實にごとくにとかん。日月の光明のよくもろくの幽冥、をのそくがごとし。このひと、世間に行して、よく衆生の闇を滅し、無量の菩薩をしへて、畢竟して一乘に住せしめん。このゆへに、有智のもの、この功德の利をきつて、わか滅度のちに、この經を受持すへし。このひとは、佛道にきて、決定してうたかひあることなけむ。

妙法蓮華經 譬喻品第二十二

そのときに、釋迦牟尼佛、法座よりたちて、大神力を現したまふ。みぎのみてをもて、無量の菩薩摩訶薩のいたゞきをなで、この言をなしたまひて、われ、無量百千万億阿僧祇劫に、このえがたき、阿耨多羅三藐三菩提の法を修習せり。いまもて、なんだちに付嘱す。なんだち、まさにこゝろをひとつにして、この法を流布し、ひろく増益せしむへし。かくのごとく、みたびもろくの菩薩摩訶薩のいたゞきをなで、このことばをなしたまはく、われ、無量百千万億阿僧祇劫に、このえがたき

「(15ウ)

阿耨多羅三藐三菩提の法を修習せり。いまもてなんだちに付嘱す。なんだち、まさに、受持讀誦し、ひろくこの法をのべて、一切衆生をして、普得聞知することを多しむへし。ゆへはいかん、如来は大慈悲まします。も

「(16オ)

ろくの慳慳なく、またおそろゝところなし。よく、衆生にほとけの智恵、如来の智恵、自の智恵をあたたへたまふ。如来は、この一切衆生の大施主なり。なんだち、またしたがつて、如来の法を學すへし。慳怪を生ずることなかれ。未来世にをひて、もし善男子・善女人あつて、如来の智恵を信せんものには、まさにために、この法華經を演説して、聞知することをしむべし。そのひとをして、佛惠をえしめんがためのゆへなり。もし衆生あつて、信受せんば、まさに如来のよの深法のなかにをひて、示教利喜すべし。なむだち、もしよくかくのごとくせば、すなはち、すでにもろくのほとけの恩を報じたてまつるとす。ときにもろくの菩薩摩訶薩、ほとけこの説をなしたまふをきゝおはりて、みなおほきによろこび、よろこふことその身に遍満しぬ。ますく恭敬をくわへて、身をまげ、かうへをうなたれ、たなこゝろをあはせて、ほとけにむかひたてまつりて、ともに、こゑをおこしてまうさく、

「(17オ)

「(17ウ)

「(18オ)

世尊^{セソ}の勅^{チヨク}のごとく、まさにつぶさに奉行^{フギヤウ}すべし。たゞししかれり。世尊^{セソ}ねかはくは、うらおもひたまふことましまされ。もろくの菩薩摩訶薩^{ボツサマカサツ}の衆^{シュウ}、かくのごとく、三反^{サンペン}ともにこゑをおこしてまうさく、世尊^{セソ}の勅^{チヨク}のごとく、まさにつぶさに奉行^{フギヤウ}すべし。たゞししかなり。世尊^{セソ}、ねかはくは、うらおもひたまふことましまされ。そのとくに、釋迦牟尼佛^{シヤカムニブツ}、十方よりきたりたまへるもろくの分身^{フンシ}のほとけをして、をのく本土^{ドノ}にかへらしめたまはんとして、この言^{コト}をなしたまふ。諸佛^{シュブツ}、をのく所安^{ショアン}にしたがひたまへ。多寶佛塔^{タホフツタウ}かへりて、もとのことくましますべし。この語^ゴをときたまふとき、十方の無量^{ムリヤウ}の分身^{フンシ}の諸佛^{シュブツ}の寶樹^{ホウジュ}下の師子^{シシ}の座^ザのうへに坐したまへるもの、をよむ多寶佛^{タホフツ}あはせて上行^{ジョウギヤウ}等の、無邊阿僧祇^{ムヘンアソウギ}の菩薩大衆^{ボツサダイシュ}、舍利弗^{セリハツ}等の聲聞四衆^{ソウモンシシュウ}、をよび一切世間の天・人・阿脩羅^{アシュラ}等^{トウ}、ほとけの所説^{ショセツ}をきゝたまひて、みなおほきに歡喜^{クワンギ}しき。

妙法蓮華經藥王菩薩本事品第二十三^{ミョウホウレンゲキヤウボツサツホンジヤウ}

そのときに、宿王華菩薩^{シュクワウカハボツサツ}、ほとけにまうしてまうさく、世尊^{セソ}、藥王菩薩^{ヤクワウボツサツ}はいかにして娑婆世界^{サハ}にあそぶ。世尊^{セソ}、この藥王菩薩^{ヤクワウボツサツ}をこぼくの百千万億那由他の難行苦行^{ナンギョウクギョウ}います。よきかな。世尊^{セソ}、ねかはくは、すこしき解説^{ケツカイ}したまへ。諸^{シュ}

「(19ウ)

天^{テン}、龍神^{リウジン}・夜叉^{ヤシヤ}・乾闥婆^{ケンダツバ}・阿脩羅^{アシュラ}・迦樓羅^{カラル}・緊那羅^{キンナラ}・摩睺羅伽^{マホロガ}・人・非人等^{ニヒニトウ}、また他の國土^{コクド}の諸來^{シュライ}の菩薩^{ボツサ}、をよびこの聲聞衆^{ソウモンシュウ}きて、みな、歡喜^{クワンギ}せん。そのときに、ほとけ、宿王華菩薩^{シュクワウカハボツサツ}につげたまはく、乃往過去無量恒河沙劫^{ナイワクワコノリヤウゴカシヤカウ}に、ほとけましくき。日月淨明德如來・應供・正遍知^{ショウペンチ}・明行足・善逝^{ゼンシ}・世間解^{セケンゲ}・無上士^{ムジョウシ}・調御丈夫^{テウゴヂョウフ}・天人^{テンニン}・師・佛^{シブツ}・世尊^{セソ}となづく。そのほとけに八十億の大菩薩摩訶薩^{ダイボツサマカサツ}・七十二恒河沙の大聲聞衆^{ゴジニシヤウサノダイソウモンシュウ}ありき。ほとけのいのちは、四万二千劫なり。菩薩の壽命^{ボツサノジュミ}もひとしかりき。かのくに、は、女人^{ニヨニ}・地獄^{ヂゴク}・餓鬼^{ガク}・畜生^{チクシヤウ}・阿脩羅等^{アシュラトウ}、をよびもろくの難^{ナン}あることなし。地のたいらかなること、たなごゝることくして、瑠璃^{ルリ}になされたり。寶樹莊嚴^{ホウジュサウエン}して、寶帳^{ホウチャウ}をうへにおはひ、たからの華幡^{カハマン}をたれ、寶瓶^{ホウビン}・香爐^{カウロ}國界^{コクカイ}に周遍^{シュヘン}せり。七寶^{シチホウ}をうてなとして、ひとつのきひとつの喜あり。そのき、うてなをさること、盡^{ゼン}一^{イツ}箭道^{ゼンダウ}なり。このもろくの寶樹^{ホウジュ}にみな菩薩^{ボツサツ}聲聞^{ソウモン}ありて、そのもとに坐せり。もろくの寶臺^{ホウダイ}のうへに、をのく百億の諸天^{シュツテン}ありて、天の妓樂^{ギガク}をなし、ほとけを歌歎^{カタン}して、もて供養^{クヤウ}をなしき。そのときにかのほとけ、一切衆生^{イツシュウジヤウ}見菩薩^{ケンボツサツ}、をよびもろくの菩薩^{ボツサツ}、もろくの聲聞衆^{ソウモンシュウ}のために、法華經^{ホケキヤウ}をときたまひき。この一切衆生^{イツシュウジヤウ}

「(20ウ)

「(20オ)

意見菩薩 キウジボサツ ねがひて苦行をならひ、日月淨明 ニツゲツツヤウミヤトアツ 德佛の法のなかにして、精進經行し、一心にほとけをもとむること、万二千歳を満しをはりて、現一切色身三昧をえてき。この三昧ををはりて、こゝろおほきに歡喜して、すなはち、念言をなさく、われ、現一切色身三昧をえたこと、みなこれ法華經をきくことをえたるちからなり。われ、いまさに日月淨明德佛 ニツゲツツヤウミヤトアツ をよひ法華經を供養したてまつるべし。すなはちのときに、この三昧にいたりて、虚空のなかより、曼陀羅華・摩訶曼陀羅華・細抹の堅黑栴檀をふらして、虚空のなかにみて、くものごとくにしてくだし、また、海岸栴檀の香をふらしき。この香、六銖は價直、娑婆世界なり。もてほとけに供養したてまつる。この供養をなすことをはりて、三昧よりたちて、みつから念言すらく、われ、神力をもてほとけを供養したてまつるといへとも、しかし。みをもて供養したてまつらんには。すなはち、もろくの香・栴檀・薰陸・兜樓婆・畢力迦・沈水・膠香を服し、また瞻蔔のもろくの華香油をのむこと、千二百歳を満しをはりて、香油 カウユ をみにぬりて、日月淨明德佛 ニツゲツツヤウミヤトアツ のみまへにして、天の寶衣をもて、みつから、みにまつひをはりて、もろくの香油をそゝき、

「(21オ)

「(21ウ)

「(22オ)

神通力の願をもて、みつからみをとほしき。光明あまねく、八十億恒河沙の世界をてらす。そのなかの諸佛、同時にほめてのたまはく、よきかなく、善男子。これ、まことの精進なり、これを真法をもて、如来を供養したてまつるとなづく。もし、華・香・瓔珞・焼香・抹香・塗香と天繪幡蓋、をよひ海岸栴檀の香、かくのこときらの種種のもろくのをもて、供養すとも、をよぶことあたはざるところなり。たとひ國城妻子をもて布施すとも、また、をよはざるどころなり。善男子、これを第一の施となづく。もろくの施のなかにきて、最尊最上なり。法をもて、もろくの如来を供養したてまつるかゆへに、この語をなしをはりて、をのく黙然したまひき。その身のひにもゆること、千二百歳、これをすぎて已後、その身、すなはち、つきぬ。一切衆生喜見菩薩、かくのとき、法の供養をなしをはりて、命終のうちに、また日月淨明德佛のくにのなかに生ぜりき。淨徳王のいゑにして、結跏趺坐して、忽然に化生し、すなはち、そのちゝのためにしかも、偈をときていはく、

大王、いままさにしるすべし。われ、かのところに經行して、すなはちのときに、一切現諸身三昧をえ、つめとめて、大精進を行じて、所愛の身を

「(22ウ)

「(23オ)

「(23ウ)

すてき。この偈をときをはりて、ちゝにまうしてまうさく、日月淨明德佛、いまなを現にします。われ、さきに、ほとけを供養したてまつりをはりて、解一切衆生語言陀羅尼をえたり。また、この法華經の八百千万億那由他・甄迦羅・頻婆羅・阿閼婆等の偈をきけり。大王、われ、いままにかへりて、また此ほとけを供養したてまつるべし。まうしをはりて、すなはち、七寶の臺に坐して、虚空に上昇すること、たかさ七多羅樹、ほとけのもとに、ゆきいたりて、頭面にみあしを礼し、十指のつめをあはせて、偈をもてほとけをほめたてまつる。

容顏はなはだ奇妙にして、光明十方をてらしたまふ。われむかひ供養したてまつる。いま、よくかへりて、親近したてまつる。そのときに、一切衆生意見菩薩、この偈をとくことをはりて、ほとけにまうしてまうさく、世尊、世尊、なをよにまします、そのときに、日月淨明德佛、一切衆生意見菩薩につげたまはく、善男子、われ、涅槃ときいたり、滅盡ときいたり。なんぢ、牀座を安施すべし、われ、今夜におきて、まさに般涅槃すべし。また、一切衆生意見菩薩に勸したまはく、善男子、われ佛法をもて、なんちに囑累す。をよひもろくの菩薩大弟子あはせて、阿耨多羅

「(24才)

三藐三菩提の法、また三千大千七寶世界のもろくの寶樹寶臺、をよび給侍の諸天をもてことくく、なんちにつく。わが滅度のち、所有の舍利またなんちに付嘱す。まさに流布せしめひろく供養をまうけ、そこばくの千の塔をたつべし。かくのごとく、日月淨明德佛、一切衆生意見菩薩に勸したまふことをはりて、よの後分に涅槃にいたりたまひぬ。そのときに、一切衆生意見菩薩ほとけの滅度を見て、非感懷悩して、ほとけを戀慕したてまつる。すなはち、海此岸極處をもて、つみぎとして、佛身を供養してもて、これをやきたてまつる。ひ滅しをはりてのちに、舍利をひろひとりて、八万四千の寶瓶をつくりて、もて八万四千の塔をたつこと、たかさ三世界、表利莊嚴して、もろくの幡蓋をたれ、もろくの寶鈴をかけたなり。そのときに、一切衆生意見菩薩、またみつから念言すらく、われこの供養をなすといへとも、こゝろなをいまたたらず、われいままさにさらに舍利を供養したてまつるべし。すなはちもろくの菩薩大弟子をよび天龍夜叉等、一切の大衆にかたはく、なんだちまさに一心に念すへし。われ、いま日月淨明德佛の舍利を供養したてまつらん。」

「(25才)

「(25ウ)

「(24ウ)

「(26才)

聞をもとむる衆、無量阿僧祇のひとをして、阿耨多羅三藐三菩提心をおこさしめ、みな現一切色身三昧に住することをえしめつ。そのときにもろくの菩薩天人阿脩羅等、そのひちなき

を見て、憂悩悲哀して、このこの言をなさく、この一切衆生喜見菩薩は、これわれらが師なり。われを教化したまふものなり。しかあるに、いまひちをやきて、身具足したまはず。ときに、一切衆生喜見菩薩、大衆のなかにして、この誓言をたつ、われふたつのひちをすてゝ、かならず、まさにほとけの金色の身をうべし。まことにして、むなしからずは、わかふたつのひちをして、還復することものとことくならしめよ。このちかひをなしおはりて、自然に還復しき。この菩薩の福德・智恵淳原なるによりて、いたすところなり。そのときにあたりて、三千大千世界六種に震動し、天より寶華ふり、一切の天人未曾有なることをえてき。ほとけ宿王華菩薩につけたまはく、なんぢ、こゝろにをきていかん。一切衆生喜見菩薩あにことひとならんや。いまの藥王菩薩これなり。その身をすてゝ布施せるところ、かくのことく、無量百千萬億那由他數なり。宿王華、もし發心して、阿耨多羅三藐三菩提をえんと思ふことあらんものは、よくてのゆび、乃至あしのひとつのゆびをとほして、佛塔に供養したて

「(26ウ)

「(27オ)

「(27ウ)

まつれ。國城妻子、をよび三千大千國土の山林河池、もろくの珍寶物をもて供養せんものにまさらん。もしまたひとありて、七寶をもて、三千大千世界にみてゝ、ほとけをよび大菩薩・辟支佛・阿羅漢に供養せん。このひとの所得の功德にはしじ。

この法華經の乃至一四句偈を受持せんには、その福もとおほし。宿王華、たとへは、一切の川流江河諸水のなかに、海を第一とするかごとく、この法華經もまたくかくのごとし。もろくの如来の所説の經のなかにをきて、もとも深大なりとす。また土山・黒山・小鐵圍山・大鐵圍山、をよび十寶山、衆山のなかに、須弥山第一たるかごとく、この法華經もまたくかくのごとし。諸經のなかにをきて、もともそのかみたり。また衆星のなかに、月天子とも第一たるかごとく、この法華經もまたくかくのごとし。千萬億種のもろくの經法のなかにをきて、もとも照明なりとす。また日天子のよくもろくの闇をのぞくかごとし。この經もまたくかくのごとし。よく一切の不善の闇を破す。またもろくの小王のなかに、轉輪聖王もとも第一たるかごとく、この經もまたくかくのごとし。もろくの經のなかにをきて、もともその尊たり。また帝釋の三十三天のなかにをきて、王なるかごとく、この經もまたくかくのごとし。諸經の

「(28オ)

「(28ウ)

なかの王なり。また大梵天王の一切衆生のちなる
 かごとく、この経もまたくかくのごとし。一切の
 賢聖學無學、をよむ菩薩のころをおこせる
 もの、ちなり。また一切の凡夫人のなかに、須陀洹
 斯陀含・阿那含・阿羅漢・辟支佛、第一たるか
 とく、この経もまたくかくのごとし。一切の如来
 の所説、もしは、菩薩の所説、もしは聲聞の所
 説、もろくの経法のなかにとも第一たり。よく
 この經典を受持することあるものもまたくかく
 のことし。一切衆生のなかにきて、また第一たり。
 一切の聲聞・辟支佛のなかに、菩薩第一たり、こ
 の経もまたくかくのごとし。一切のもろくの
 経法のなかにきて、もとも第一たり。ほとけ諸
 法の王としますがごとく、この経もまたくかく
 のことし。諸経のなかの王なり。宿王華、この経はよ
 く一切衆生をすくものなり。この経はよく一切
 衆生をして、もろくの苦惱をはなれしめたまふ。こ
 の経はよくおほきに、一切衆生を饒益して、その
 願を充滿したまふ。清凉のいけのよく一切の
 ろくの渴乏のものにみつるかごとく、さむきもの
 のひをふたるかごとく、はだかなるものころもを
 えたるかごとく、あきひとぬしをえたるかごと
 く、この母をえたるかごとく、わたりにふねをふた
 るかごとく、やまひにくししをえたるかごとく、くら
 きに
 とほしびをえたるかごとく、まどしきにたから

「(29ウ)

「(29ウ)

をふたるかごとく、たみの王をえたるかごとく、賈客
 のうみをえたるかごとく、とほしひの闇をのぞくか
 ごとく、この法華経もまたくかくのごとし。よく衆
 生をして、一切の苦一切の病痛をはなれ、よく一
 切の生死の縛をとかしめたまふ。もしひとこの
 法華経をきくことをえて、もしはみつからかき
 もしはひとをしへてもかゝしめむ。所得の功
 徳は、ほとけの智慧をもて、多少を籌量する
 とも、そのほとりをえじ。もしこの経巻をかきて、
 華・香・瓔珞・焼香・抹香・塗香・幡蓋・衣服・種種の
 とほしび・蘇燈・油燈・諸香油燈・瞻蔔油燈・俱
 曼那油燈・波羅羅油燈・波利師迦油燈・那波摩
 利油燈をもて供養せん。所得功德またく無量
 ならん。宿王華、もしひとありてこの藥王菩薩
 本物品をきかんものは、また無量無邊の功德を
 えん。もし女人ありて、この藥王菩薩本物品
 をきつて、よく受持せば、この女身をつくし
 て、のちにまたうけし。もし如来滅後のち
 の五百歳のなかに、もし女人ありて、この經典を
 きつて、説のこく修行せば、こゝに命終して、す
 なはち、安樂世界の阿彌陀佛の大菩薩衆に
 圍繞せられたまへる住處にゆきて、蓮華のなかの
 寶座のうへに生ぜん。また貪欲のためになや
 されし。またく瞋恚・愚癡のためになや

「(30ウ)

「(31ウ)

「(31ウ)

まされし。またく、橋慢・嫉妬・諸垢のためにな
 やまされし。菩薩の神通無生法忍をえむ。この忍
 をうることをはりて、眼根清淨ならん。この清淨の眼
 根をもて、七百二十億那由他恒河沙等の諸佛
 如来を見てまつらん。このときに諸佛、はるかに
 ともにほめてのたまはく、よきかなく、善男子、
 なんちよく釋迦牟尼佛の法のなかにして、
 この經を受持し讀誦し思惟し、他人のため
 めにとける。所得の福德無量無邊なり。ひも
 やくことあたはじ、みづもたゝよはすことあた
 はじ。なんちが功德をは、千佛ともにきたまふとも、
 つくさしむること、あたはじ。なんちいますでに
 よくもろくの魔賊を破し、生死のいくさを
 やぶり、諸餘の怨敵をもみなことく摧滅しつ。善男子、百千の諸佛神通力をもちてと
 もになんちを守護したまふ。一切世間天人のなかに
 をきてなんちにしくものあることなし。たゞ
 如来をのそきたてまつりてそのもろくの
 聲聞・辟支佛・乃至菩薩の智慧・禪定なんぢ
 とひとしきものあることなし。宿王華、この菩薩
 はかくのとき功德智慧のちからを成就せり。もし
 ひとありて、この藥王菩薩本事品をきつて、
 よく隨喜し讚善せんは、このひと現世にく
 ちのなかよりつねに青蓮華のかほいだし、
 身の毛孔のなかより、つねに牛頭栴檀のかほいださん。

「(32オ)

「(32ウ)

「(33オ)

所得の功德はかみの所説のごとし。このゆへに、宿
 王華、この藥王菩薩本事品をもてなんちに囑
 累す。わか滅度のちくくの五百歳のなかに、閻
 浮提に廣宣流布して、断絶せしめ、惡魔・魔民
 もろくの天龍夜叉・鳩槃荼等をして、そのたより
 をえせしむることなかれ。宿王華、なんちまさに神通
 のちからをもて、この經を守護すべし。ゆへはいかん
 この經はすなはち、閻浮提のひとのやまひの良藥
 たり。もしひとやまひあらんに、この經をきくこと
 えば、やまひすなはち消滅して、不老不死ならん。
 宿王華、なんちもしこの經を受持することあらん
 ものを見ては、青蓮華をもて抹香をもらみて
 て、そのうへに供養すべし。散しをはりて、この念
 言をなせ、このひとは、ひさしからすして、かならず
 まさにくさをとりて、道場に坐してもろくの魔
 軍をやぶるへし。まさに法のかいをふき、大法の
 つゝみをうちて、一切衆生の老病死海を度脱す
 べし。このゆへに、佛道をもとめんもの、この經
 典を受持することあらむひとを見ては、まさにか
 くのことく、恭敬のこゝろをなすべし。この藥王菩
 薩本事品をときたまひしときに、八万四千の
 菩薩、解一切衆生語言陀羅尼をえつ。多寶如来
 寶塔のうちにして、宿王華菩薩をほめてた
 まはく、よきかなく、宿王華、なんち不思議の功

「(33ウ)

「(34オ)

徳を成就して、すなはち、よく釋迦牟尼佛にかくのときのことをとひたてまつりて、無量の一切衆生を利益す。

妙法蓮華經妙音菩薩品第二十四

そのときに、釋迦牟尼佛、大人相の肉髻光明をはなち、をよび眉間白毫相のひかりをはなちて、あまねく東方百万億那由他恒河沙等の諸佛の世界をてらしたまふ。このかずをすぎをはりて、世界あり。淨光莊嚴となづく。そのくに、ほとけまします。淨華宿王智如来・應供・正遍知・明行足・善逝・世間解・無上士・調御丈夫・天人師佛・世尊となづく。無量無邊の菩薩大衆のために恭敬し圍繞せられたまひて、ために法をときたまふ。釋迦牟尼佛の白毫の光明あまねくそのくにをてらしたまふ。そのときに、一切淨光莊嚴國のなかに、ひとりの菩薩あり。なを妙音といふ。ひさしくすてにもろくの徳本をうへて、無量百千万億の諸仏を供養し、親近したてまつり、しかうして、ことごとく、甚深の智恵を成就し、妙幢相三昧・法花三昧・淨徳三昧・宿王戲三昧・無縁三昧・智印三昧・解一切衆生語言三昧・集一切功德三昧・清淨三昧・神通遊戲三昧・惠炬三昧・莊嚴王三昧・淨光明三昧・淨藏三昧・不共三昧・日旋三昧をえたり。かのこと

きらの、百千万億恒河沙等の諸大三昧をえたり。釋迦牟尼佛のひかり、その身をてらしたまふ。すなは

「(34ウ)

「(35オ)

「(35ウ)

ち、淨花宿王智佛にまうしてまうさく、世尊、われ、まさに娑婆世界に往諸して、釋迦牟尼佛を禮拜し、親近供養したてまつる。をよび文殊師利法王子菩薩・藥王菩薩・勇施菩薩・宿王華菩薩・上行意菩薩・莊嚴王菩薩・藥上菩薩

そのとき、淨華宿王智佛、妙音菩薩につげたまはく、なんぢ、かのくにをかるしめて、下劣のおもひをなすことなれ。善男子、かの娑婆世界は高下不平にして、土石・諸山あり。穢惡充滿し、佛身卑小なり。もろくの菩薩衆もそのかたちまたちいさし。しかるに、なんぢが身は、四万二千由旬、わが身は六百八十万由旬なり。なんぢが身は第一端正なり。百千万の福ありて、光明殊妙なり。

このゆへに、なんぢゆきて、かのくにもしはほとけ、菩薩をよひ國土に、下劣のおもひをなし、かるしむることなれ。妙音菩薩、そのほとけにまうしてまうさく、世尊、われいま娑婆世界にいたらむこと、みなこれ如来のちから、如来の神通遊戲如来の功德智恵莊嚴ならむ。こゝに、妙音菩薩、座をたゞず、身動揺せずして、三昧にゐる。三昧のちからをもて、耆闍崛山にきて、法座をさることをからすして、八万四千の衆寶蓮華を化作す。閻浮檀金をくとし、白銀を葉とし、金剛をひげとし、甄叔迦寶をもて、その臺とせり。そのときに、文殊師利法王

「(36オ)

「(36ウ)

「(37オ)

子、この蓮華を見て、ほとけにまうしてまうさく、世尊、このなむの因縁ありてか、まつこの瑞を現ぜる。そこばくの、千万の蓮華ありて、閻浮檀金をくきとし、白銀を集とし、金剛をひけとし、甄叔迦寶をもて、その臺とせり。そのときに釋迦牟尼佛、文殊師利につけたまはく、これ妙音菩薩摩訶薩の淨華宿王智佛のくにより、八万四千の菩薩のために、圍繞せられて、この娑婆世界に來至して、われを供養し、親近礼拝せんとおもひ、また法華經を供養し、きゝたてまつらんとおもへるなり。文殊師利、ほとけにまうしてまうさく、世尊この菩薩は、なむの善本をうへなんの功德を修してか、しかもよくこの大神通力ある、いつれの三昧を可行する。ねかはくは、われらかためにこの三昧の名字をときたまへ。われらまたつとめて、これを修行せんと思ふ。この三昧を行して、すなはちよくこの菩薩の色相の大小・威儀・進止を見ん。たゞし、ねかはくは、世尊神通力をもて、かの菩薩をきたらしめて、われをしてみることをえしめたまへ。そのときに釋迦牟尼佛、文殊師利につけたまはく、これひさしく滅度の多寶如來、まさになんぢかためにしかもその相を現したまふへしと。ときに多寶佛、かの菩薩につけたまはく、善男子きたりて、文殊師利法王子なんぢが身を見んとおもへる。ときに妙音菩薩、かのかにより濕して、八万四千の菩薩とともに

「(38ウ)

「(37ウ)

「(38ウ)

發來す。所經のもろく、のくに六種に震動して、みなことくく、七寶の蓮華をふらし、百千の天の樂うたさるに、をのづかなる。この菩薩のめは、廣大の青蓮華の葉のことし。たとひ百万のつきを和合せらん。その面貌端正なるにことまたこれにすぎたり。この身は真金のいろにして、無量百千の功德莊嚴せり。威德熾盛にして、光明照耀し、諸相具足して、那羅延固の身のことし。七寶の臺にいりて、虚空に上昇せり。地をされること、七多羅樹もろく、の菩薩衆恭敬し圍繞して、この娑婆世界の普聞囀山に來詣しぬ。いたりをはりて、七寶の臺よりおりて、價直百千の瓔珞をもたもて、釋迦牟尼佛のみもとにいたりぬ。頭面にみあしを礼して瓔珞を奉さす。しかふして、ほとけにまうしてまうさく、世尊、淨華宿王智佛、世尊を問訊したまふ、少病煩惱起居輕利にして、安樂に行したまふやいなや。四大調和しますやいなや。世の事しのびたまひつべしやいなや。衆生は度しやしやいなや。貪欲・瞋恚・愚癡・嫉妬・慳慢おほきことなしやいなや。父母を孝せさることなしやいなや。沙門をうやまはず。邪見なることなしやいなや。善心ありやいなや。五情を攝するやいなや。世尊、衆生はよくもろくの魔怨を降伏するやいなや。ひさしく滅度の多寶如來、七寶の塔のうちにましくて、

「(39オ)

「(39ウ)

きたりて法きゝたまふやいなや。また多寶如来を問訊したまふ、安穩少悩にして、堪忍しひさしく住したまふやいなや。世尊、われ多寶佛の身を見たてまつらんと思ふ。たゞし、ねかはくは世尊、われにしめして見せしめたまへ。そのときに釋迦牟尼佛、多寶仏にかりたまはく、この妙音菩薩あひ見たてまつるえんをおもへり。ときに多寶佛、妙音につけてのたまはく、よきかなく、なんぢよく釋迦牟尼佛を供養したてまつり、をよひ法華經をき、あはせて、文殊師利等を見んかために、ことさらこゝに來至せり。そのときに華德菩薩、ほとけにまうしてまうさく、世尊、この妙音菩薩は、なんの善根をうへ、なんの功德を修してか、この神力ある。ほとけ華德菩薩につけたまはく、過去にほとけましくき、雲雷音王・多陀阿伽度・阿羅呵三藐三佛陀となつてたてまつる。くにを現一切世間となつて、劫をは喜見となづく。妙音菩薩万二千歳にきて、十萬種の妓樂をもて、雲雷音王佛に供養したてまつり、あはせて、八萬四千の七寶の鉢を奉上しき。この因縁果報をもて、いま淨華徇王知佛のくに生じてこの神力あり。華德、なんぢがこゝろにきて、いかん、そのとき雲雷音王佛のみもとに、妙音菩薩と妓羅をもて供養し、寶器を奉上せしもの、あにことひとならんや。いまこの妙音菩薩摩訶薩これなり。華

「(40オ)

德、この妙音菩薩はむかし無量の諸佛に供養し親近して、ひさしく德の本をうへたり。また恒河沙等の百千萬億那由他のほとけにあへり。華德、なんぢたゞ妙音菩薩はその身こゝにあるとみる。しかも、この菩薩、種種の身を現して、處處にもろくの衆生のために、この經典をとく。あるひは梵王の身を現じ、あるひは帝釋の身を現し、あるひは自在天の身を現し、あるひは、大自在の身を現し、あるひは、天大將軍の身を現し、あるひは毘沙門天王の身を現し、あるひは轉輪聖の身を現し、あるひはよろくの小王の身を現し、あるひは長者の身を現し、あるひは居士の身を現し、あるひは長者の身を現し、あるひは宰官の身を現し、あるひは婆羅門の身を現し、あるひは比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷の身を現し、あるひは長者居士の婦女身を現し、あるひは宰官の婦女の身を現し、あるひは婆羅門の婦女の身を現し、あるひは童男童女の身を現し、あるひは天・龍・夜叉・乾闥婆・阿脩羅・迦樓羅・緊那羅・摩睺羅伽・人・非人の身を現して、この經をとく。諸有の地獄・餓鬼・畜生、をよびもろくの難處みなよく救済す。乃至王の後宮にして、變じて女身となりて、この經をとく。華德、この妙音菩薩は、よく娑婆世界のもろく

「(41ウ)

「(42オ)

「(42ウ)

の衆生を救護するものなり。この妙音菩薩はかくのごとく種種に變化し、身を現して、この娑婆國土にありて、もろくの衆生のために、この經典をとおに、神通・變化・智慧にをきて、損減するところなし。この菩薩は、若干の智慧をもて、あきらかに娑婆世界をてらして、一切衆生をして、をのく所智をえしむ。十方恒河沙の世界のなかにしても、またくかくのごとし。もし聲聞のかたちをもて、得度すべきものには、聲聞のかたちを現してために法をとく。辟支佛のかたちをもて得度すべきものには、辟支佛のかたちを現してために法をとく。菩薩のかたちをもて得度すべきものには、菩薩のかたちを現してために法をとく。ほとけのかたちをもて、得度すべきものには、すなはちほとけのかたちを現してために法をとく。かくのごとく種種に度すべきところのものにしたかひてためにかたちを現す。乃至滅度をもて得度すべきものには、滅度を示現す。華德、妙音菩薩摩訶薩は大神通智慧のちからを成就すること、その事かくのごとし。そのときに、華德菩薩、ほとけにまうしてまうさく、世尊この妙音菩薩はふかく善根をうゑたり。世尊、この菩薩はいつれの三昧に住してか、よくかくのごとく、變現するところありて、衆生を度脱したまふ。ほとけ、

「(43オ)

「(43ウ)

華德菩薩につけたまはく、善男子、その三昧をば現一切色身となづく。妙音菩薩、この三昧のなかに住して、よくかくのごとく無量の衆生を饒益す。この妙音菩薩品をときたまふときに、妙音菩薩とともにきたれるもの、八万四千人みな現一切色身三昧をえつ。この娑婆世界の、無量の菩薩、またこの三昧をよひ随維尼をえつ。そのときに、妙音菩薩摩訶薩、釋迦牟尼佛、をよひ多寶佛塔を供養したてまつることをはりて、本土還歸す。所經のもろくの國六種に震動して、寶蓮華をふらし、百千万億の種種の妙樂をなす。すてに本國にいたりて、八万四千の菩薩のために、圍繞せられて、淨華宿王智佛のみもとにいたりて、ほとけにまうしてまうさく、世尊、われ娑婆世界にいたりて、衆生を饒益し、釋迦牟尼佛を見たてまつり、をよひ多寶佛塔をみたてまつりて禮拜供養し、また文殊師利法王子菩薩を見、をよひ藥王菩薩・得勤精進力菩薩・勇施菩薩等を見つ。また、この八万四千の菩薩をして、現一切色身三昧をえしめつ。この如音菩薩來往品をときたまひしときに、四万二千の天子は、無生法忍をえ、華德菩薩は法華三昧をえてき。

「(44オ)

「(44ウ)

「(45オ)

「(45ウ)

妙法蓮華經卷第七